

気候危機・原発・理不尽な公共事業 に立ち向かう



目次

気候危機・原発・理不尽な公共事業に立ち向かう	
COP27の成果と課題.....	2
課題も明らかになった大学の出前授業.....	4
ゲスト授業 「“気候危機” 待ったなし、 希望ある未来をどうつくっていくか」	4
COP27の体験を出前授業で伝える.....	5
講演をやってみて感じたこと.....	6
理不尽な公共事業NOの会発足.....	7
早川篤雄さんを追悼する私の思い.....	8
活動日誌	9
リレーエッセイ.....	10

COP27の成果と課題

CASA専務理事 早川光俊

2022年11月6日から、エジプトのシャルム・エル・シェイクで気候変動枠組条約第27回締約国会議(COP27)が開催されました。COP27は、予定された11月18日の会期を2日間延長し、11月20日午前9時過ぎに、COP27決定、パリ協定第4回締約国会合(CMA4)決定を採択して閉幕しました。39時間を超える延長は、歴代2番目です。

COP27の成果と課題

COP27は、「実施のCOP」、「アフリカCOP」と言われました。

「実施のCOP」の意味は、2021年のCOP26で「パリ協定」の運用ルールが決まり、「1.5℃までに気温上昇を抑える努力を決意をもって追及する」ことが合意され、「2030年までの排出削減が決定的に重要」とされたことから、COPの役割が「行動」、「実施」の段階に入ったことを意味しています。COP26では、2022年中に(すなわち、COP27までに)、各国の目標(NDC)を1.5℃目標と整合性をもった目標にするよう再検討することが要請されていました。

「アフリカCOP」とは、気候変動に対し脆弱な国が多いアフリカで開催されることから、途上国が30年前から要求していた「損失と損害(ロス&ダメージ)」の資金メカニズムについて決着をつけるCOPだとの意味です。

COP27の最大の成果は、「損失と損害」について「基金」を創設することが決まったことです。一方、排出削減については、決定の表現は昨年のCOP26と同じで、目立った進展はありませんでした。現在の削減目標では、1.5℃はもちろん、2℃目標にも遠く及ばないことが明らかになっています。

IPCC第6次評価報告書は、このままの排出ペースが続けば、早ければ2030年に平均気温の上昇は1.5℃に到達するとし、2030年までの対策強化が極めて重要だとしています。2030年まであと8年。排出削減の歩みを止めている余裕はまったくありません。

「損失と損害」についての「基金」を創設

損失及び損害とは、適応しても対処しきれない気候変動の影響・被害に対し、どう対応するかの問題です。「損失」とは、海面上昇による国土の喪失、生態系の喪失などの不可逆的な気候変動の影響を意味し、「損害」とは建築物の損傷やインフラの損傷など修復可能な気候変動の影響を意味するとされています。最近、世界中で、熱波や干ばつ、猛烈な降雨などの異常気象が頻発しています。「アフリカの角」と言われるエチオピア、ソマリア、ケニア、ジブチ、エリトリアなどでは、2020年10月から3年連続の干ばつに襲われ、とりわけソマリアは、過去10年間のうちに3回も深刻な干ばつに襲われ、2021年から始まり現在も続いている干ばつでは、5歳未満人口のほぼ半数に当たる150万人の子どもたちが急性栄養不良に陥っていると報道されています。パキスタンでは、集中豪雨により国土の3分の1が水没し、被災者は3,300万人に上り、子どもを含む1,700人が死亡、およそ800万人が避難生活を余儀なくされていると報道されています。こうした「損失と損害」に対し、小島しょ国や後発開発途上国などは、資金メカニズムでの対処を主張してきましたが、先進国は新たな資金供与に消極的で真面目に対応してきませんでした。

今回のCOP27でようやく基金の創設が決まりました。基金の具体的な制度や資金規模などはこれからの交渉ですが、歴史的な成果だと言ってよいと思います。

進まなかった排出削減の交渉

一方、排出削減の交渉は前に進むことはできませんでした。

2022年10月26日に発表された条約事務局の「NDC統合報告書」は、昨年COP26以降今年9月23日までに24カ国が新たな目標を提出したが、これら24カ国の引き上げられた削減目標を考慮しても、温室効果ガス排出量は、2030年までに、2010年比で1%増加し、今世紀末には平均気温は2.5℃上昇してしまうとしていました。

前回のCOP26の成果は、決定文書の中に「(CCS等の)対策をしていない石炭火発の段階的削減」についての言及が入ったことです。COP27では、さらに踏み込んだ決定に合意できるのかどうか課題でした。

交渉の過程では、石炭火力だけでなく、「(対策のされていない)すべての化石燃料の段階的廃止」の提案もなされ、アメリカを含む80カ国がこれに賛同を示しましたが、産油国などが反対し、決定には入りませんでした。議長国のエジプトも積極的には対応しませんでした。

周回遅れの日本の気候変動対策

11月9日、COP27最初の「化石賞」は日本が受賞しました。日本が公的資金を化石燃料事業へ拠出している世界最大の国であることが、受賞理由です。日本は石炭火力の全廃シナリオをもっていないことも含めて、世界の非難を浴び続けています。

また、日本は今年G7の議長国でありながら、岸田首相はCOP27に参加しませんでした。G7の首脳で参加しなかったのは、カナダと日本だけです。西村大臣が参加してスピーチをしましたが、日本は「パリ協定の1.5℃目標と整合した長期戦略及びNDCを既に策定」していると発言し、ひんしゅくを買いました。日本の削減目標は、世界第6位の累積排出量である日本の排出責任からしても極めて不十分であるうえ、この発言は、日本の排出目標を見直すつもりはないことを意味しています。

COP28に向けて

COP28は、今年11月30日からアラブ首長国連邦(UAE)のドバイで開催されます。UAEは石油輸出国機構(OPEC)の一員で、気候変動対策に積極的な国とはいえません。2025年には、2035年の削減目標(NDC)を提出することになっています。G7などを含めて、日本政府に気候変動対策へのリーダーシップ、とりわけ日本の削減目標の引き上げを求めてゆく責任が、私たち日本の市民にあると思います。



COP27 11月9日の化石賞の授賞式

課題も明らかになった大学の出前授業

公害・地球懇常任幹事 奥田さが子、橋本良仁

昨年12月、山梨の都留文科大学の3クラスで対面とグループ討論形式による授業を2日行いました。今回の出前講座は、講師として奥田、橋本だけでなくFridays For Futureで活動している学生3人が参加しました。

同年代の学生が語りかける授業に対し学生たちは予想していた以上の反応もありましたが、学生たちが、原発(特に事故や被害の

事実など)や再生可能エネルギーに関する知識が不足していることを痛感、これからの授業で検討しなければならない課題も明らかになりました。

温室効果ガス排出量・エネルギー需給統計と将来予測報告書や文献などについては産総研の歌川学さんが協力してくれました。

ゲスト授業 「“気候危機” 待ったなし、希望ある未来をどうつくっていくか」

都留文科大学非常勤講師 西村美智子

COP27がエジプトで開催されたタイミングを捉えて「地球温暖化と人権」をテーマに授業を行ないました。新聞記事やDVDで干ばつによるソマリアの飢餓や壊滅的な洪水によってパキスタンで甚大な被害と犠牲者が出ていることを知り、気候危機が途上国の人々の命や人権をいかに脅かしているかについて理解を深めました。学生たちは次のようなことを述べていました。

「地球温暖化は環境問題であり人権問題と関連づけて考えたことはなかった。温暖化で死と隣り合わせの生活をしている人々の生存権はどうなっているのか。・・・先進国が変わらなければいけない。」「先進国やその市民(私も含めて)は、温暖化による災害や人権問題を軽視し、自分たちの豊かな暮らしのために生きてきた。

そして、災害や問題が顕著になってから救済策を考える。やはり人間はことが起きてから、問題が表面化しないと、気づいていても見て見ぬふりする愚かな生き物だと思った。何も行動しない自分という人間にも悲しくなった。」等々。そんな学生たちに、専門家の先生から話を聞くと共に、COP27に参加したりFFFで活動している同世代の学生にぜひ出会ってほしい、交流してほしいという思いを抱きながらゲスト授業の日を迎えました。

予想通り授業は、講師の方々の長年にわたる研究や実践、若い人たちの情熱的な取り組みがビンビン伝わってくる大変貴重で有意義なものでした。授業を通して、政府の気候変動対策に疑問を持ったこと、過去の公害や福島への思いを新たにしたこと、自分の頭でしっかり考え行動していこうと思ったこと、教師になった時にこんなことに取り組みたいとの意欲を持たれたことなどは幸いでした。

一方で、地球環境問題や気候危機を自分ごととして捉えられていないことや原発事故による放射能被害の恐ろしさを学んでいないこと、再生エネルギーについての正確な知識や情報の不足など、課題を感じさせることも多々ありました。

しかし、この授業が“知る、考える、行動する”きっかけ、自分自身の変容の第一歩になったことは間違いのないと思います。改めてこのような授業の意義を感じ、継続していくことの大切さを思いました。

COP27の体験を出前授業で伝える

Fridays For Future Tokyo 国立音楽大学3年 黒部睦

今まで何度か気候変動問題について授業や講演などをしたことはありましたが、大学の授業でお話しさせていただくのは初めての経験でした。また、ほとんどが学校教育に携わる進路を希望する方に向けて話をするのも初めてでした。いただいた授業の感想の中で、主権者教育として生徒にどう伝えていくか、教員として何を教えるか、といった「気候変動を教える」視点にたった意見が多かったことが印象的でした。

私からは、2022年11月に行われた気候変動枠組み条約締約国会議(COP27)での体験を、世界がどう気候変動問題を対処しようとしているのかという点に注目してお話させていただきました。

COP27の会場には、政府、企業、アクティビストやNGOなど、様々なセクターの人が集まっています。ニュースで報じられる閣僚級会議などはCOPのほんの一部にすぎず、展示ブースや屋外でのアクションなど実際には様々なアプローチで気候変動に向き合う「気候変動を取り巻く世界の縮図」のような場でした。

もちろんジェンダーバランスや世代の偏りが気になる時も多かったですが、大学生の参加者や私と同じくアクティビストとして声を上げる人も想像以上に多かったです。

そして、同じアクティビストでも気候変動の被害を多く受ける地域の人声は、先進国に住む1人としてしっかり責任を持って伝えていなくてはならないという私の思いも伝えました。こういった身近な立場の人の存在や活動を知ってもらうことで、自分にもできることがある問題であり、そして先進国であり災害大国に住む人として深く関係のある問題であるということが伝わったのではないかと、いただいた感想を読んでいても思いました。

今回私の後に話をした同じくFridays For Futureのオーガナイザーである2人は「気候正義とは何か」、そして「Fridays For Futureはどのような目的で何をしているのか」について話しました。

ただ気候変動に関する知識を伝えるのではなく、世界の現状と解決に向けた取り組みを知った上で、どう関わっていくかや何をすべきかは自分で考えてもらいたいという思いで内容を決めました。そしてそれは今回だけの話ではなく、教育の場においてももっと主体的に自ら問題を見つけ行動する人を育てるような教え方をして欲しいと思っています。



これからの将来世代の気候変動への認識や考え方を作っていくという意味でも、教育に携わりたい同世代に声を届けていくことがいかに影響力が大きいアクションであるかを感じました。

そして私たちが伝えたことが、友達や家族、そして将来の生徒さんたちに伝わり、大きな変化になることを大いに期待しています。

講演をやってみて感じたこと

Fridays For Future Yamanashi 都留文科大学1年 菅木翼愛

2022年の12月中旬、私が通っている山梨県の都留文科大学で、2週間連続で気候変動問題について講演をさせていただきました。このような環境問題を解決するためには、未来の世界を担っている子どもたちに社会問題について詳しく教える、教育することがとても重要になってくると考えています。そのため学校講演についてはこれから自分も行っていきたいなと考えていたのでとてもいい経験になりました。今回はその経験を通して感じたことを書きたいと思います。

まず1番大きく感じたことは、「人の考えを変えることは非常に難しい」ということです。これについては以前から感じていたことですが、気候変動の危機感を他の人と共有することは自分の想像以上に難しいことが今回の講演を通して分かりました。今回の授業の私の中の目標は、気候変動問題に関心を持ってもらうための第一歩として、データを基に気候変動に対して恐怖感を持ってもらうことでした。いくつか衝撃を感じてもらうようなデータを取り上げて講演の中に組み込みましたが、学生からのリアクションペーパーを読んでみたところ、あまり効果はなかったのかなと感じました。また再生可能エネルギーに対するマイナスのイメージが大きいことを実感しました。

講義の中で再エネについて少し詳しく説明したりよくある疑問に答えたりしましたが、今まで構築されてきた再エネに対するイメージのままであまり変わっていない印象を受けました。講義内で説明していることに対しても再び疑問として学生から挙げられていたので、その説明があまり印象に残らなかったのだと思います。ただ、集中力はあまり長く持たないために学生が聞いていなかった可能性があるのも、これについては授業の組み立て方を工夫することも重要になっていくのかなと感じました。

今回の経験は私にとって非常に貴重なものになりました。私たちは環境問題を解決するために国や自治体に対してアプローチをすることも大切ですが、仲間を増やすことや環境問題に対して意欲的になってくれる人を増やすことも大切だと考えます。そのため私たちはこのような環境問題をどう伝えていくかは今後も研究していかなければなりません。うまくいかなくてもあきらめずに、今後もアクションを続けていきたいと思います。よろしくお願いします。



理不尽な公共事業NOの会発足

弁護士 後藤富和

2022年11月5日、福岡県弁護士会館において「理不尽な公共事業にNOの会」が立ち上がりました。馬奈木昭雄弁護士を顧問に、代表世話人荒木龍昇福岡市議、世話人として池永修弁護士、後藤富和ほか九州を中心に全国各地で理不尽な公共事業と闘う市民が賛同しています。

全国の多くのダム、辺野古基地、諫早湾干拓事業など、私たちの周りには、市民を幸せにしない、むしろ不幸にする「公共」事業が溢れています。

老朽化した原発を60年までの稼働を認める。国民の命の軽視に他なりません。

政官財の利権が絡み、多額の税金が費やされ、全国の豊かな自然環境が破壊されました。

気候危機、生物多様性の危機が深刻化し、私たち人類の生存基盤が損なわれようとしているにもかかわらず、今も全国各地で理不尽な公共事業が強行されています。

いったい何のための誰のための公共事業でしょう。

馬奈木昭雄弁護士は基調講演で、これまで取り組んだ公害事件の経験から、公共性を決めるのは住民であること、住民参加とは行政が決定したことに意見を述べるのではなく住民自身が決定することなのだとし強く呼びかけました。

経済成長の呪縛を解き、生態系を保全し、地域住民みんなが恩恵を享受できる、住民の役に立つ「公共事業」に変えていく必要があります。国や自治体は、住民の主張に耳を傾け、科学的な知見に基づき、丁寧に住民の合意を得ることが必要であり、そのプロセスを公開すべきです。住民自らが主体となれる機会を提供し、さまざまな住民の声と活力を生かす取り組みをすべきです。

私たちは全国で「理不尽な公共事業」とたたかっている市民と連帯し、公共事業の実態と在り方を学び、市民に伝え、行動していきたいと考えています。「理不尽な公共事業NO!の会」への賛同を呼びかけます。

「理不尽な公共事業NOの会」では、現地フィールドワークや住民との意見交換、研究者の知見の学習などを通じて、今この瞬間にも強行されている理不尽な公共事業を止め、あるべき公共事業、破壊された自然環境の回復の道を探求していきたいと考えています。

2023年1月21日には、福岡県弁護士会館において、諫早湾干拓事業によって破壊された環境の再生に取り組む「よみがえれ！有明」の漁業者の皆さん、石木ダム建設を阻止しようと闘う「石木川守り隊」の皆さん、清流川辺川の環境を守ろうと闘う「県民の会」の皆さん、須崎公園の再開発事業から「あるべき都市の自然に取り組む市民」の皆さんからそれぞれの現状と課題を伺い闘いの経験を共有する報告会を開催します。

また、有明海のフィールドワークや、気候危機と闘う若者達の活動から学ぶなど様々なイベントも企画していきます。

詳細はフェイスブック「理不尽な公共事業NOの会」賛同人グループでお知らせいたします。

「理不尽な公共事業NOの会」賛同人グループを検索して「参加」をクリックしてください。理不尽な公共事業と闘う全国の皆さんとつながり、失われた自然環境を取り戻したいと思えます。ご参加をお待ちしています。



早川篤雄さんを追悼する私の思い

福島原発被害者訴訟支援 東京首都圏連絡会
吉川方章



2022年11月30日の東電交渉の際、貴方は同行の方とともに途中退席されました。

”どこか体調が悪いのか？”と思いましたが、その1か月後に訃報を受け取り、本当に愕然としました。私と貴方の出会いは、総行動実行委員会福島現地調査の一員として宝鏡寺を訪れたことに始まります。

青年教師時代、1971年東京電力福島第一原発1号機運転開始と相次ぐ事故、「公害から楢葉町を守る町民の会」や「原発公聴会の民主化を要求する会」を立ち上げ、75年第二原発1号機設置許可取り消し訴訟を起こし、多くの住民が原発神話と札束でごまかされる中で、県・国・東電に申し入れや提案を繰り返したことを語られました。不勉強の私は本当にショックで強い衝撃と感動を覚えたのです。

私たちは2018年2月15日に東京首都圏連絡会結成をしますが、貴方は、原訴連を代表として連帯挨拶をされ、闘いの展望を示してくださいました。2019年1月原訴連総会と学習決起集会(寺西教授「9年目の課題」講演)原告・弁護団・支援による役員会、国会院内集会などでご一緒しました。

また、公害総行動実行委員会では、合宿、政府・東電交渉を再三おこない、昨年6月5日東電社長小早川氏による「原告の皆さまに対する謝罪について」の文書を出させました。早川団長のもと弁護団、支援が一つになって闘った貴重な成果です。

東日本大災害から10年目の2021年3月11日に「非核の火」を宝鏡寺境内に灯されます。また、安斎育郎立命館大名譽教授とともに「原発悔恨・伝言の碑」を建て、氏の50年来の資料を展示する「伝承館」もつくられました。(フクシマ現地調査報告のDVDと報告集参照。早川住職がお元気な声でご挨拶するお姿を観ることができます。)

福島も広島・長崎も非人間的行為により尊厳が踏みにじられました。原発と原爆は表裏の関係、原発がある限り”安全”はありません。

貴方は反戦平和・脱原発・民主主義・安全な暮らしを求めて生涯を貫かれました。どれだけ多くの人々が励まされたことでしょうか。もっともっと学び、共に闘いたかった、残念でたまりません。

すべての原発裁判に勝ちたい、断固として国・東電の責任と賠償を追及したい、原発推進の政府を変えたい、大きく・幅広く団結し国民協同の闘いをしたいと心から願っています。

私たちは、岸田政権が突然出してきた原発再稼働、新增設、次世代炉などという方針には断固反対です。早川さんの遺志を継いで頑張ってください。

どうか安らかに眠りください。

活動日誌

2022年

12月

- 22日(木)【原発推進のGXに反対します！】
官邸前&オンライン抗議集会
(主催FoE Japan)
- 22日(木)13:30～ ノーモアミナマタ東京裁判
(東京地裁)
- 22日(木)大学出前講座
- 24日(土)日本環境会議諫早湾干拓問題
提言委員会

2023年

1月

- 7日(月)ノーモア・フクシマ「いわき市民訴訟」
最高裁判決を克服する判決を求める緊急要請
- 11日(金)全労連旗開き
- 12日(木)宇都宮大学公害セミナー
「語り継ぐ足尾II」
- 12日(木)原発被害神奈川訴訟(2陣)第3回
- 17日(火)公害総行動将来検討委員会
- 18日(水)東電刑事裁判控訴審 判決言い渡し
- 18日(水)原発被害千葉避難者訴訟第2陣第12回
- 20日(金)公害総行動第1回実行委員会
- 21日(土)つなごう命の会
ZOOM 学習会 (通算 第55回)
- 21日(土)＜公害資料館連携フォーラムin福島
2023プレ企画＞
- 24日(火)原発と人権 キックオフ集会
第二東京弁護士会 1003A・B会議室

発行 : 公害・地球環境問題懇談会
(公害・地球懇/JNEP)

連絡先 : 〒160-0022 東京都新宿区新宿2-1-3
サニーシティ新宿御苑10F
TEL 03-3352-3663

FAX 03-3352-9476

郵便振替 : 00140-1-80892

今後の予定

2023年

1月

- 25日(水)子ども甲状腺裁判 : 806号 11:00～
- 25日(水)原発をなくす全国連絡会
第11回総会
全労連会館2階 17:30～20:00
Zoom/ID : 866 6561 4052
パスコード : nonukes
- 26日(木)新横田訴訟第1回弁論 10:00～
- 27日(金)横須賀火力発電訴訟
判決 地裁 103号 14:00～

2月

- 11日(土)「地域の価値」をつくる
出版記念シンポジウム
みずしま財団 13:30-16:30
<https://mizushima-f.or.jp/news/4857/>
- 13日(月)第48回市民科学入門講座
エピジェネティクスから見た
カネミ油症
講師 : 澁谷 徹 さん
(環境エピゲノミクス研究所)
19:00～20:30
https://www.shiminkagaku.org/csi_jwebinar_introduction/
- 13日(月)原発被害飯館訴訟7回
- 16日(木)脱炭素チャレンジカップ2023
10:00～16:55
<https://www.zenkoku-net.org/datsutanso/>
- 22日(水)講演会
「民主主義と地方政治の再生へ」
講師 : 内田聖子さん
中原市民館多目的ホール 18:30～
主催/川崎合同法律事務所
- 26日(日)静岡 原発をなくす会 総会

JNEPリレーエッセイ

第8回：映画評「グレタ - ひとりぼっちの挑戦」

公害・地球懇 常任幹事 奥田さが子

学校での出前講座などで若い世代と接した経験からすると、気候危機がより身近で実感できるようになったこともあり、この3年ほどで気候危機に対する関心や理解はだいぶ進んできたようです。けれど、この映画に出てきた世界の若者たちに比べ、日本の若者たちはまだまだ自分事として立ち上がることまではできていません。たったひとりで立ち上がり、行動を始めたグレタはやっぱりすごい、と思います。

でも、この映画で見るグレタの素顔。父親が心配して一生懸命説得しても食事ができないときの緊張感、ニューヨークへヨットで行く船中での不安っぱいの独白、決して強いだけではない一人の若者として、それでも行動する姿を、今の若者たちにこそ見てほしいと思いました。

日本の子どもや若者は頑張れば明るい未来をつくれると思っている割合が諸外国と比べてとても低いし、自己肯定感が低いというデータがあります。希望を持たなくさせているのは日本社会の現状でしょう。エネルギーに関しても政府の宣伝に乗せられ、日本には自然エネルギーの資源が少ないとか、コストがかかるとか、原発がないと電力不足に対応できないとか思っているおとなは多いし、だから気候危機に関しても出口が見えず希望を持たないでいる若者も多いように感じます。

頑張って社会を変える努力をすると同時に、立ち上がる若い世代を全力で応援してふやしたい!! グレタの行動を陰ひなたで支え応援し、ともに闘う人たちのように。

